

聖書:列王記第二14章1～16節

説教:あなたは心が高ぶっている

はじめに

いつものように前回までのおさらいをしてから今日の箇所を見てまいります。北イスラエルのヨアシュが隣のアラムからたびたび侵略を受け困り果てていた時、預言者エリシャが弓と矢を使ってあなたはアラムに勝利するのだと励ますのですが、王は主を信じ切ることができず、結局、北イスラエルの苦しみは終わらない。王の信仰はこのようにまことに頼りないものであったのにもかかわらず、主はアブラハム、イサク、ヤコブとの契約のゆえにイスラエルの人々を顧みてくださり、滅ぼし尽くすことは望まれなかった。それが前回までの話でした。

今日は舞台が変わって南王国の九代目の王であるアマツヤに焦点を当てていきます。彼はどのような王であったのか。そのときどんなことが起きたのか。そこから神はどのような方であるのかをもとに考えてまいります。

1 ユダの王アマツヤ

1) 律法に従ったが

3節。「彼は主の目にかなうことを行なった。ただし、彼の父祖ダビデのようではなく、すべて父ヨアシュが行ったとおりに行なった。」

それに続いて、5、6節には自分の父である王を討った家来たちを打ち殺したとあります。この家来たちのしたことは12章の最後に書いてあります。アマツヤの父ヨアシュがこの家来たちの謀反によって打ち殺されていたのです。それで息子のアマツヤが王となるのですが、そのときはまだ二十五歳でした。王とは名ばかりで、実際は家来たちの助けがなければ何もできません。家来たちにとってこんな好都合なことではなく、思うように国を動かすことができた。しかしそんなことはいつまでも続かない。アマツヤはじつと我慢しながら、父の仇を討つ機会を待っていた。そうやって力と蓄え、あるとき家来たちを倒していく。こういう場合、謀反を起こした当の本人だけでなく、その息子も一緒に殺されるのが通例でした。ところが、アマツヤは申命記24章16節のみことばに従って、息子たちには手を出さなかった。それで主の目にかなうことを行なったと言われました。

2) エドム人を打つ

アマツヤはこのことで自信を得たのでしょうか。今度は外に向かって進んで行き、「塩の谷で一万人のエドム人を討ちます。エドム人は、死海の南側に住んでいて、以前はユダ王国と同盟を結ぶほど仲が良かった。ところが、五代目の王ヨラムがバアルを礼拝してめちゃくちゃなことをやり始め、エドムと一緒にやられてはいけないということになり、同盟を破棄しユダに背いてしまう。それでアマツヤの代になって、エドムを懲らしめたということのようです。

3) セイル人の神々を持ち帰る(歴代誌第二25章)

これだけなら信仰とは関係ない話に見えます。ところが並行箇所の歴代誌第二25章14節を見ると、意外なことが分かってくる。「アマツヤがエドム人を討って帰って来た後のこと、彼はセイル人の神々を持って来て、それらを自分の神々として立てた。彼はその前で伏し拝み、犠牲を供えていた。」

セイル人のことは、エドムに住んでいたことの他は詳しいことは分かりません。おそらくこんなことだったんでしょう。アマツヤがエドムに勝ち、意気揚々としてエルサレムに帰ろうと道を歩いていると、あるものが目に留まった。これは何かと尋ねると、「セイル人が拝んでいる神の像です」との答え。アマツヤの目にはこれがよほど魅力的に見えたのでしょうか。この像を持ち帰り、自分の神として伏し拝み、犠牲も供えていく。神は黙ってはいません。預言者をアマツヤの前に遣わし、こう語らせる。「なぜあなたは、あなたの手から自分の民を救い出すこともできないような神々を求めたのか。」しかしアマツヤは聞く耳を持たず、「それ以上何かを言ったら、おまえの命はない」と言って追い返してしまう。

2 対決

1) あざみと杉

最初は主の目にかなうことを行い、モーセの律法も守っていたアマツヤでした。それなのになぜこんなにも簡単に信仰を失い、ほかの神々に走るのか。不思議に思うかもしれません。

でも自分のことを振り返ったらどうでしょうか。初めの頃は「私なんかとても無理です」と言って謙遜だったのに、だんだん慣れてきて、いろ

いろいろなことを任されるようになり、それがうまくいくと、自分はなんでもできると思いはじめる。周りはよく見えていますから、「あなたはそのまま行ったら大けがをするよ」と忠告してくれるのですが、かえって反発し、身の丈に合わない大きな勝負に出て行く。そんなことがあります。まさにアマツヤはそんな状態になってしまった。8節。「そのときアマツヤは、エフの子エホアハズの子、イスラエルの王ヨアシュに使者を送って言った。『さあ、直接、対決しようではないか。』」

これに対するイスラエルの王ヨアシュの答え。9節。「レバノンのあざみが、レバノンの杉に人を遣わして、『あなたの娘を私の息子の妻にしてくれないか』と言ったが、レバノンの野の獣が通り過ぎて、そのあざみを踏みじった。」

あざみは南ユダのアマツヤのこと、杉は北イスラエルのヨアシュのこと。イスラエルには木がほとんどありませんから、杉は非常に貴重で、それに比べればあざみはどこにでも生えている。ですからヨアシュはこう言ったことになる。「あなたはなにを寝ぼけたことを言っているのか。あざみが杉に勝負を挑んで勝てると思っているのか。」

2) 心が高ぶっている

続く10節ではもっとはっきり言う。「あなたはエドムを打ち破って、心が高ぶっている。誇ってもよいが、自分の家にとどまっていなさい。なぜ、あえてわざわざ引き起こし、あなたもユダもともに倒れようとするのか。」

ようは、「変なことを考えないで、家でおとなしくしている。」そこまで言われたようなもの。ことばはきついです、それだけアマツヤは高ぶっていたということです。

3) 敗走

もちろんアマツヤは素直にヨアシュの忠告を聞くはずはない。ますます自信過剰になって、むきになっていく。その結果、ヨアシュにコテンパンに打ちのめされ、エルサレムの城壁まで壊されてしまう。二人の力の差は歴然で、最初から勝負にならない戦いだったのです。それなのに高慢になったアマツヤは、勝てると思い込んでしまった。どうしてこんなことになってしまったのでしょうか。

3 高慢と偶像

1) 高慢の見分け方

詩篇138篇6節にこうあります。「まことに主は高くあられますが低い者を顧みてくださいます。

しかし高ぶる者を遠くから見抜かれます。」聖書では、なんども高ぶりや高慢が罪であることを語っています。それで私たちも、高慢になっていないかと常に気を配るわけですが、これが実に難しい。ついさっきまで謙遜でいられたと思っても、次の瞬間、すぐに高慢の芽がもたげてくる。まさに水に浮かぶ木の葉のようなもので、まことに頼りない。

いったいどうしたら高慢にならずに済むのか。そこでまず自分が高慢であるのかないのか、見分ける方法。二つあります。一つ目。アマツヤのようにほかの人から「あなたは高慢になっている」と言われたとき、そのときどう思うか。そこが勝負です。「私は高慢ではない。」そう思ったら、間違いなく高慢な状態です。その反対に、「はい、あなたの言うとおり私は高慢になっていました」と素直に受けとめられるなら、大丈夫です。こうやって見分けることができます。

では二つ目。アマツヤは、自分が若くてまだ王として経験が浅いと思っていた時はまだ謙遜でいられ、主の目にかなうことを行っていました。ところがエドム人との戦いに勝つと高慢になり、彼はセイル人の偶像を拝み、預言者の忠告も聞かなくなる。そこから何が分かるか。高慢というものは、ただ心の中にとどまっているのではなく、表に形となって現れていく。アマツヤの場合は、セイル人が拝んでいた偶像というものに姿として現れました。

2) 高ぶりが偶像を造る

モーセの十戒の二番目に「あなたは自分のために偶像を造ってはならない」とあります。それは、ただほかの神々を拝んではならないということだけでなく、自分の中にある高ぶりが偶像を拝む行為として現れてくる。そういう意味でもあります。別の言い方をすれば、人は心が高ぶっていくと、自分の好みにあった神を選んでいく、ということになる。偶像は英語でアイドルと言いますが、まさにアイドルとして飾っておく。それぞれが自分の気に入った神を拝めばよい。世の人たちには当たり前のことかもしれませんが。それで世の中が平和になるというのなら、それでもよいでしょう。でもどうですか。平和になりましたか。いや、ますます問題が深刻になっていくばかり。みな、どうしてだろうかと頭を抱えている。でも理由は簡単です。自分こそ何者であるかとおごり高ぶっているから。ほかの人を蹴落として、自分が幸せになることだけ

を考えるわけですから、争いが生じるのは当然で、平和は来るはずはない。

3) イエス・キリストの謙遜によって

どうしたらいいのでしょうか。この世の中は、罪によって逆さまになっていると考えるとわかりやすい。逆さまですから反対のことを考えればよい。私たちが高慢であるというのなら、その反対に神がどれほど謙遜であるかを思い起こしてみらうのでしょうか。イエス・キリストは神のひとり子でしたが、私たちのところに来られた時、この方は言われたのでしょうか。「あなたがたは、わたしに仕えなさい。」むしろ反対でした。マルコ20章45節にこうあります。「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」そのことばのとおり、十字架の苦しみを背負ってくださった。そんな神を見て、私たちはどう思いますか。「私の好みではない」と思いますか。神がこれほどまでにへりくだってくださり、罪を悔いてわたしのところに戻りなさいと手を差しのべてくださっているのに、それでもまだ私たちは高慢のまま、自分の気に入る神を選ぶのでしょうか。イエス・キリストのようにへりくだる神は他にいるのでしょうか。いのちを捨てて私たちを愛そうとした神は他にいるのでしょうか。だから私たちは、へりくだってくださるイエス・キリストに立ち戻ります。神がへりくだって下されるのを見たなら、私たちはいつまで高慢でいられるでしょう。

それでも高ぶりは、一瞬にして私たちの心を占領し、一瞬にして十字架のイエスから私たちを遠ざけようとしています。だからこそ、私たちは毎日へりくだってくださる主イエスの十字架を仰ぎ見たいと願うのです。